

インタビュー調査の難しさと醍醐味

学生時代を含め、多くの社会調査に携わってきた。その経験を通して、社会調査、とりわけインタビュー調査の難しさと醍醐味を感じてきた。

インタビュー調査では対象者にアプローチし、調査に応じてもらうまでが最初のハードルとなる。学生や院生の頃は、研究室から依頼状を送付しておいた対象者の自宅を訪ねて行ってインタビューをお願いしたり、電話で事前に交渉したりした。留守の場合も多く、接触できても調査協力を得られないことも多かった。時には、他の調査員が一度断られた家に、再度訪問して調査協力をお願いする役目を与えられたこともあった。

調査協力の承諾を得ると、いかに本音を聞かせていただくかが次のハードルになる。大まかな質問項目を用意した調査票にしたがい、臨機応変に質問を加えながら、インタビューが進む。録音する機械がない時代には、質問しながらメモを取るのが難しかった。

それ以上に注意したのは、対象者に本音で回答してもらえるようにすることである。これがうまくいかないと正確な情報が得られず、これができれば充実した調査になる。私にとって初めての調査で、漁家に嫁いだ女性に結婚して苦勞したことを尋ねた時に、つらい思いが蘇ったようで、涙を流しながら話していただいた経験がある。最近、アイヌの方々を調査した時にも、差別を受けた経験を語るくんだり、同様な体験をしている。また、北海道の農家調査で、先祖が北海道にやってきた経緯から始まり、農業経営の歩みや本人の生活史などを聞いているうちに、8時間も経ってしまったこと

がある。調査を終えた時に、相手の方が「疲れたが、人生を振り返れたようだ」と一言つぶやいてくれたので、内心ほっとした覚えがある。

インタビューで得られたデータを整理する作業にも困難がある。録音機械がない時代にはメモをたよりに、「文字起こし」をしなければならなかった。北海道出身でなかったため、「冬はぼっこはいて学校へ通ったさ」などのメモがどのような意味なのかはすぐには理解できず、「文字起こし」するのに苦勞した。レコーダーを用いるようになってからは、全体的にメモが大雑把になる傾向が生じて、電池切れで録音できていない時には、後日苦勞することになった。

調査結果を公表する際にも、ハードルが生じることがある。対象者が触れてほしくない情報を扱う時には、慎重になる必要がある。農業共同経営の調査を行い、論文をまとめようとした時に、解散が話題になるほど総会が紛糾した経緯にも言及する必要があり、改めて農場を訪ね、構成員全員の前で了解を得たこともある。

インタビュー調査には、調査のプロセスの各段階に独特の難しさがあるが、大きな価値もある。アンケート調査とは異なる質の高いデータが得られるだけではない。インタビューを通して多様な人々の人生や考え方を知ることができるのは、調査者にとって貴重な経験になる。インタビュー調査の醍醐味といってもよい。とくに、生活の歩みを聞くインタビュー調査で、この感が強くなる。研究にとっての価値とはひと味異なるインタビュー調査の意義が、そこにあると思っている。

小内 透

札幌国際大学人文学部 特任教授